

News Letter

自治医科大学附属病院 卒後臨床研修センター

令和
4年
9月

朝夕はめっきり涼しくなりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。さっそく Newsletter 第54回配信です！ どうぞお楽しみください。

【 病理診断部・病理診断科 】

みなさん、こんにちは！今回は、附属病院で患者さんの診断に関わる病理診断部門について紹介します。

当病理診断部門には、15名の認定病理専門医（内、3名は非常勤）、2名のシニアレジデント、3名の大学院生（病理学講座の大学院生を除く）が在籍し、診療、研究、教育に従事しています。年間病理検体数は、組織診 15,000件強、細胞診 15,000件、術中迅速診断 900件、病理解剖 約20件と、国内の大学病院の中でもトップクラスです。自治医科大学内の他部門と同様、スタッフの出身大学は様々（現在の状況：宮崎、東京、信州、自治、富山医薬、東京医科歯科、日医、山形、日本歯科、琉球、新潟、熊本、高知、東女医、北里、金沢）で学閥はありません。

病理専門研修（病理診断コース）は、3年間のトレーニングで、特殊なものを除き独自に病理診断を遂行できる力を養うことを目標としています。また、「病理アカデミック・レジデントコース（大学院博士課程）」という、臨床医にも病理を学ぶ機会を提供するための制度もあります。

さらに、病理診断部内に全国（2022年8月現在）500名以上の病理医が所属する一般社団法人 PathPort どこでも病理ラボ（代表 福嶋敬宜教授）（<https://pathport.or.jp>）を設立して運営しており、日常的に他施設の病理医との情報交換やコンサルテーションをオンライン上で行える体制を構築しています。

私たちの目指すところは、病理診断部門の充実はもちろんですが、病理診断が適切に患者さんに還元されることであり、そのためには、病理診断に素養のある臨床医が増えてくれることも望んでいます。臨床と病理が真に意義のあるキャッチボールができる、そんな病理診断部門を目指しています。

興味のある人はwebサイトもご覧の上、一度見学に来て下さい。



自治医科大学
病理診断部を
拠点にした
全国的な
病理医
ネットワーク
にもセミナー
など学べる
機会が沢山

community
consultation
conference

先輩達と一緒に標本を観察しながら
診断にたどり着く思考過程も学ぶ

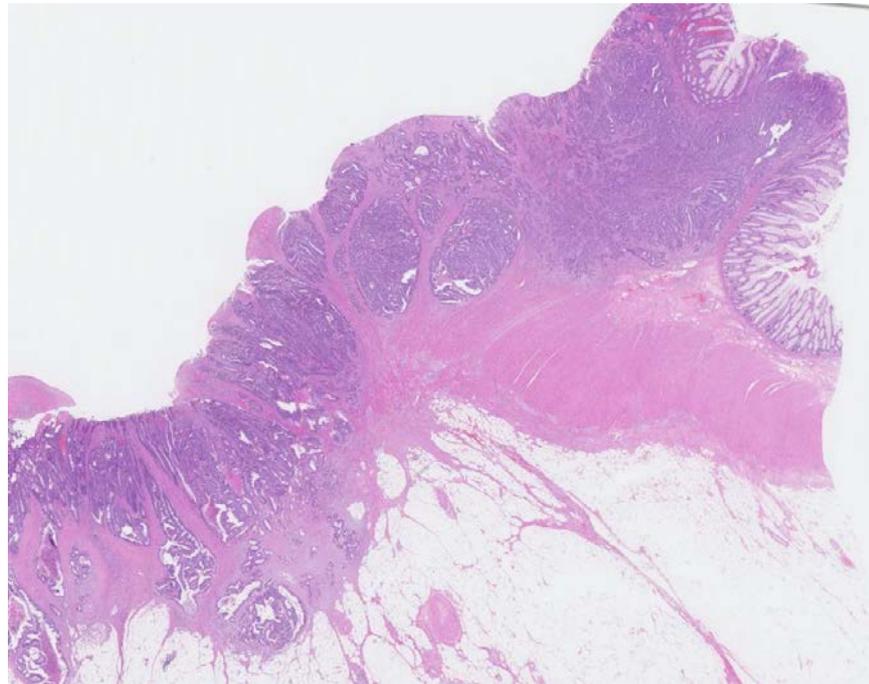
検体エコーと標本の比較で
画像診断にフィードバック

病理検体の切り出しを通して、
病変を把握し組織像を想像する

【医師国家試験予想問題】

大腸癌切除検体の腫瘍断面の HE 標本の画像を示す。癌の浸潤は以下のどの層まで及んでいるか？

- (a) 粘膜層
- (b) 粘膜筋板
- (c) 粘膜下層
- (d) 筋層
- (e) 漿膜下層



答え (e) 漿膜下層

癌組織は核の腫大や N/C 比の増大、密な増殖から HE 標本では青っぽく見えています。画像の右端の方で正常の大腸の壁構造が観察できます。粘膜層や筋層を識別できるでしょうか？筋層は平滑筋線維が豊富なため HE 標本では濃いピンク色に見えます。癌は筋層を超えてその下の漿膜下層に達していることが分かります。漿膜に達している可能性も考慮されますが、画像および選択肢から除外されます。数年前の医師国家試験で実際に胃の正常組織の画像を見て粘膜下層がどこかを答える問題が出題されたことがありました。本問題では大腸の壁構造を把握したうえで癌組織を識別し癌の浸潤がどこまで及んでいるかを判定する問題としてみました。

